

劉禹錫「泰娘歌」をめぐって (下)

山本敏雄

国語教育講座

On Liu Yu-xi's "Song for Tai-niang" (2)

Toshio YAMAMOTO

Department of Japanese Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

前稿では「泰娘歌」の序文に登場する人物と作者との関係を中心に、白居易の「琵琶行」、杜牧の「杜秋娘詩」との比較を視野に入れつつ、考察した¹。本稿では「泰娘歌」の詩本文について読み進め、前稿で触れた問題も含め、改めて考えてみたい。

前稿では、劉禹錫にとって、泰娘という女性は長安と朗州において彼の上司であった韋夏卿と張憇に養われていたという近い関係にある妓女であったことを指摘し、また、蘇州で韋夏卿に見初められた後、長安に行き、韋夏卿亡き後、張憇とともに劉禹錫の左遷先であった朗州に行くという泰娘の地理的な移動が、劉禹錫の移動とも重なる部分が多く、朗州での偶然の再会ということも含めて、これらが詩作の動機ともなっているのではないかと指摘しておいた。

一、妓女を詠う

「泰娘歌」が妓女を詩に詠っているという点について、齋藤茂氏に次のような指摘がある。

同様に妓女を主人公とし、その名を篇名とした作品は、他に元稹の「崔微歌」(『全唐詩』巻四二三。但し断片しか現存しない)「李娃行」(同巻四二三に断片のみ残る)、李賀の「洛姝真珠」(『李賀歌詩篇』巻一)「許公子鄭姬歌」(同巻四)、および樂府ではないが後の杜牧の「杜秋娘詩」「張好好詩」(いずれも『樊川詩集』巻一)などがあり、一つのテーマとして広がりを見せていたことがわかるが、この詩(「泰娘歌」)は運命に翻弄されて凋落した妓女の物語を歌うという点で、その中でも新しさを盛っている²。

上に挙げる作品のうち、元稹の作品は完全には残っておらず、李賀の作品は二首ともに、洛陽の妓女の美しさや音楽の才能などを愛でたものにすぎず、妓女の人生や運命に対する感慨などは表現されない。言い方

を変えれば、政治や運命に翻弄される妓女を身近な存在として、樂府の対象として詠うという姿勢は、劉禹錫の「泰娘歌」以前には完全な作品の形としては殆ど見あたらないと言える。

また、山内春夫氏も「牧以前に、不幸な妓妾の名を詩題とし、その生涯を艶且つ哀れに描いた長詩として、「杜秋娘詩」に近いものは「泰娘歌」があるのみなのである」という³。してみれば、運命に翻弄され、凋落した妓女の生涯を詠う作品として「泰娘歌」は殆ど初めての作品といってもいいのではないだろうか。

中唐期、妓女が士人階層の宴席に同席することが多くなり、妓女を詠う題詠詩、妓女との贈答詩が増え、その死を悼む詩も登場するようになったといわれる⁴。その背景として安史の乱以後梨園の弟子が流落し、地方の有力者のもとに樂人たちが庇護されることが一般化し、士人階層との接触の機会が増えたことが挙げられる⁵。

『唐會要』巻三「出宮人」の条によれば、武徳九年(626)に「三千餘人」の宮人を宮中より出したという記事に始まり、貞観、開元、大暦、貞元、元和、長慶、宝暦、開成の各時期について記載があるが、年号を見てみれば、特に大暦十四年(779)から開成三年(838)まで、中晩唐期の約六十年間に集中していることがわかる。大暦十四年には「宮人百餘人」、貞元二十一年(786)には「宮人三百人」、「後宮及教坊女妓六百人」、元和八年(813)には「宮人二百車」、同十年には「宮人七十二人」、宝暦二年(826)には「宮人三千人」、開成三年には「宮人劉好奴等五百餘人」とあり、少なく見積もってもこの時期だけでも約四千八百人の宮人や宮妓が民間に出ることになる。もちろんそのすべてが音楽の技芸を持ち、士人階層の宴席に侍ったわけではないであろうが、広い視野で見れば、民間と宮中の人間の往来がこの時期盛んになり、宮人が士人階層と接する機会も増えたことは想像に難くない。この時期、宮廷世界と士人階層を中心とする宮廷外の世界との交通往来が深まったと見ることもできよう。

さて、泰娘が宮人であったということは考えにくい
が、「泰娘歌」が作られた背景に上に述べたような政
治的社会的状況が存在したことは踏まえておく必要が
あるだろう。

二、「泰娘歌」について

では、劉禹錫が泰娘という妓女の悲運の生涯を詩に
したという点に眼を向けてみよう。

作者劉禹錫と泰娘の関係については、明確なところ
はわからないものの、序文に登場する人物と劉禹錫と
の関係に注意してみると、それらの人との関係を通し
て、泰娘の存在を感じ取ることが出来、身近な存在の
妓女であったといえることは前稿で述べた。また、劉
禹錫が泰娘の歌舞を鑑賞した可能性に言及するものも
ある⁶。では、詩では、泰娘のことをどのように詠っ
ているのであろうか。

この詩は換韻体の七言古詩である。まず、全文を挙
げておく⁷。

- | | |
|------------|------------------------|
| 泰娘家本閭門西 | 泰娘 家は本と閭門の西 |
| 門前綠水環金隄 | 門前の綠水 金隄を環る |
| 有時妝成好天氣 | 時有りて妝成る 好き天氣 |
| 走上皐橋折花戲 | 走りて皐橋に上り 花を折りて
戯る |
| 5 風流太守韋尚書 | 風流太守 韋尚書 |
| 路傍忽見停隼旗 | 路傍 忽ち見て 隼旗を停む |
| 斗量明珠鳥傳意 | 斗量の明珠 鳥 意を傳へ |
| 紺幃迎入專城居 | 紺幃 迎へて入る 專城の居 |
| 9 長鬟如雲衣似霧 | 長鬟は雲の如く 衣は霧に似た
り |
| 錦茵羅薦承輕步 | 錦茵 羅薦 輕歩を承く |
| 舞學驚鴻水樹春 | 舞は驚鴻を學ぶ 水樹の春 |
| 歌撩上客蘭堂暮 | 歌は上客を撩す 蘭堂の暮 |
| 13 從郎西入帝城中 | 郎に従ひて西のかた帝城の中に
入り |
| 貴遊簪組香簾櫳 | 貴遊 簪組 香簾櫳 |
| 低鬟緩視抱名月 | 鬟を低くし 緩やかに視て 名
月を抱き |
| 纖指破撥生胡風 | 纖指 破撥すれば 胡風生ず |
| 17 繁華一旦有消歇 | 繁華も一旦 消歇する有り |
| 題劍無光履聲絕 | 題劍光無く 履聲絶ゆ |
| 洛陽舊宅生草萊 | 洛陽の舊宅 草萊生じ |
| 杜陵蕭蕭松柏哀 | 杜陵 蕭蕭として 松柏哀し |
| 21 妝匣蟲網厚如繭 | 妝匣の蟲網 厚きこと繭の如し |
| 博山鑪側傾寒灰 | 博山の鑪側 寒灰傾く |
| 蘄州刺史張公子 | 蘄州の刺史 張公子 |
| 白馬新到銅駝里 | 白馬新たに到る 銅駝の里 |
| 25 自言買笑擲黃金 | 自ら言ふ 笑を買ふに黄金を擲
つと |
| 月墮雲中從此始 | 月の雲中に墮つること此れ從り |

始む

- | | |
|------------|------------------------|
| 安知鵬鳥坐隅飛 | 安んぞ知らん 鵬鳥坐隅に飛び |
| 寂寞旅魂招不歸 | 寂寞たる旅魂 招けども歸らざ
らんとは |
| 29 秦嘉鏡有前時結 | 秦嘉 鏡に有り 前時の結 |
| 韓壽香銷故篋衣 | 韓壽 香は銷ゆ 故篋の衣 |
| 山城少人江水碧 | 山城人少なく 江水は碧なり |
| 斷雁哀猿風雨夕 | 斷雁 哀猿 風雨の夕 |
| 33 朱弦已絶爲知音 | 朱弦已に絶つは 知音の爲 |
| 雲鬢未秋私自惜 | 雲鬢は未だ秋ならず 私かに自
ら惜しむ |
| 舉目風煙非舊時 | 目を舉ぐれば 風煙 舊時に非
ず |
| 夢尋歸路多參差 | 夢に歸路を尋ぬるも 參差たる
こと多し |
| 37 如何將此千行淚 | 如何せん 此の千行の涙を將て |
| 更灑湘江斑竹枝 | 更に湘江 斑竹の枝に灑ぐを |

三十八句からなるこの詩には前稿で取り上げた序文
が添えられているが、議論の都合上、煩を厭わずにこ
れも挙げておく。

泰娘本韋尚書家主謳者。初尚書爲吳郡得之，命樂工誨
之琵琶，使之歌且舞。無幾何，盡得其術。居一二歲，
攜之以歸京師。京師多新聲善工，於是又捐去故伎，以
新聲度曲。而泰娘名字往往見稱於貴遊之間。元和初，
尚書薨於東京，泰娘出居民間。久之爲蘄州刺史張愔所
得。其後愔坐事謫居武陵郡。愔卒，泰娘無所歸。地荒
且遠，無有能知其容與藝者。故日抱樂器而哭，其音焦
殺以悲。雒客聞之，爲歌其事，以足乎樂府云。

泰娘は本と韋尚書の家に謳を主る者なり。初め尚書吳
郡爲りしとき之れを得，樂工に命じて之れに琵琶を誨
へ，之れをして歌ひ且つ舞はしむ。幾何も無くして，
盡く其の術を得たり。居ること一二歲，之れを携へて
以て京師に歸る。京師に新聲，善工多し。是に於て又
故伎を捐て去り，新聲の度曲を以てす。而して泰娘
の名字，往往貴遊の間に稱せらる。元和の初め，尚書
東京に薨じ，泰娘出でて民間に居る。久しうして蘄州
刺史張愔の得る所と爲る。其の後，愔事に坐して武陵
郡に謫居す。愔の卒するや，泰娘歸する所無し。地荒
れて且つ遠く，能く其の容と藝とを知る者有る無し。
故に日々樂器を抱きて哭き，其の音焦殺にして以て悲
し。雒客之を聞き，爲に其の事を歌ひ，以て樂府に足
さんと云ふ。

詩の内容について序文を参考にしつつ見ていきた
い。劉禹錫の作品については近年いくつかの注釈書が
出版されているのでそれらも参照する⁸。

冒頭の四句では先ず、泰娘が蘇州の西門である閭門

のあたりに住んでいたことが示される。その閭門内にある皐橋で着飾って戯れている姿が詠われるが、蔣本、高本は李白「長干行」の「妾髮初覆額，折花門前戲」という句を引く。「長干行」で詠われているのは幼い結婚前の女兒であるが、「泰娘歌」でも泰娘の幼く無邪気な様子がまず示され、その後の悲運の人生との対比が鮮明になっている。

五句目からの四句は韋夏卿が泰娘を見だし、刺史の住まいである「城居」に入れたことをいう。『唐刺史考全編』によれば、韋夏卿が蘇州刺史であったのは、貞元十二年(796)から貞元十六年(800)の間である⁹。序文の「居一二歳，携之以歸京師」という表現を勘案すれば、韋夏卿が泰娘を自分のもとに置くようになったのは貞元十四年前後ということになる。

九句目からの四句では、泰娘の髪や衣裳、その軽やかな足取り、さらには舞や歌のすばらしさが詠われる。ここまでの部分は序文の「泰娘本韋尚書家主謳者。初尚書爲吳郡得之，命樂工誨之琵琶，使之歌且舞」までが相当する。韋夏卿が泰娘を見だしたことは「初尚書爲吳郡得之」と簡単に述べられるが、詩では先に述べたように八句を費やしてその状況が視覚的な描写に重点を置いて表現される。

詩では歌舞を得意としたことは推察されるが、琵琶についてはここでは触れていない。逆に、詩では強調されないが、序文では「泰娘本韋尚書家主謳者」と、歌を得意とした家妓であることが先ず述べられる。劉禹錫は泰娘以外にも「與歌者米嘉榮」(巻二十五)、「與歌者何戡」(巻二十五)、「與歌童田順郎」(巻二十五)と歌い手に詩を贈ったり、「聽旧宮中樂人穆氏唱歌」(巻二十五)のように歌を詩の題材にした詩がしばしば見られる¹⁰。音楽の中でも特に歌に興味を示していることは、「竹枝詞」などの民歌に倣った作品で知られていることとつながっているであろう。ここまでの蘇州における泰娘を詠った部分である。

十三句目からの四句は、泰娘が韋夏卿に従って長安に行き、貴顕の間で人気を博したことが詠われる。「低鬟緩視抱名月，纖指破撥生胡風」の二句は琵琶の演奏の描写であるが、「破撥」については蔣本、陶本、高本のいずれも「劇彈」の意であるとする。激しい撥の演奏法で「胡風」、つまり異国情緒の漂う音楽を奏するというのである。序文で「京師多新聲善工，於是又捐去故伎，以新聲度曲」というが、当時京師で流行していた「新聲」こそ、この「胡風」の音楽だったのだと思われる。泰娘は自分のものとして身に付けるようになっていたのである。白居易の「琵琶行」の序で「聽其音，錚錚然有京都聲」と表現される琵琶の音楽もおそらく当時長安で流行していた「新聲」であったのだろう。泰娘の華やかな生活はここまでで終わる。

十七句以降は最後まで泰娘の悲運な人生が語られる。序文の「元和初，尚書薨於東京，泰娘出居民間」

と対応する部分が十七句目から二十二句目までの六句である。「繁華一旦有消歇，題劍無光履聲絕，洛陽舊宅生草萊，杜陵蕭蕭松柏哀」の四句は元和元年三月に韋夏卿が洛陽で亡くなり、故郷である杜陵に埋葬されたことをいう¹¹。「妝奩蟲網厚如繭，博山鑪側傾寒灰」の二句は保護者の居なくなった泰娘の生活を象徴的に詠う。

序文では、「久之爲蘄州刺史張憇所得」とあるが、『唐刺史考全編』(巻一三一、淮南道蘄州刺)によれば、張憇が蘄州刺史(湖北省)の任にあったのは元和二年(807)頃から元和四年にかけてであるから、泰娘は韋夏卿の死後、一年から三年のうちに張憇に引き取られたことになる。詩では「蘄州刺史張公子，白馬新到銅駝里，自言買笑擲黃金，月墮雲中從此始」とあり、文字通りには、妓女であった泰娘を洛陽の銅駝里で金銭を費やして引き取り、そこから男女の仲が始まったということになる。

次に、序文には「其後憇坐事謫居武陵郡」とある。張憇が左遷されたのは元和五年、劉禹錫が朗州に左遷されてから五年後のことである¹²。詩では張憇と泰娘の生活と張憇の左遷には触れず、二十七、八句目で「安知鵬鳥坐隅飛，寂寞旅魂招不歸」と、いきなり朗州での張憇の死を暗示する。賈誼の「鵬鳥賦」の序に基づく表現であるが、長沙に謫居していた賈誼の故事を踏まえ、朗州に左遷された張憇の死を暗示している¹³。さらには張憇に伴って朗州へとやって来た泰娘、ひいては朗州に貶謫の身となっている作者自身の悲運をも示唆するような表現である。

序文の続く部分では「憇卒，泰娘無所歸。地荒且遠，無有能知其容與藝者。故日抱樂器而哭，其音樵殺以悲」と、張憇の死後、寄る辺ない身となり、遠隔の地で自らの容貌や技芸を認めてくれる人物がいないことを嘆く泰娘の様子が述べられる。「抱樂器」は特定の楽器の名を挙げてはいないが、「低鬟緩視抱名月，纖指破撥生胡風」という詩句を思い起こせば、琵琶と考えるのが穏当なところであろう。京師の「新聲」を奏でた楽器を京師を遠く離れた土地で弾く女性、左遷の身でそれを聴く詩人という設定は、白居易の「琵琶行」と同じ枠組みである。

序文では「其音樵殺以悲」と、その音色が切羽詰まってお悲しげであることを述べるが、詩では「秦嘉鏡有前時結，韓壽香銷故篋衣，山城少人江水碧，斷雁哀猿風雨夕，朱弦已絕爲知音，雲鬟未秋私自惜」とある。秦嘉と韓壽の故事は張憇と泰娘の関係を夫婦関係ととらえ、張憇が亡くなって、その関係が失われて久しいことを示す。次の二句は朗州の寂しい土地柄を言うが、楽器については音色が悲しげであるとは言わず、楽器を演奏することを絶つということで泰娘の悲しみを表現する。

最後の四句、「舉目風煙非舊時，夢尋歸路多參差，

如何將此千行淚，更灑湘江斑竹枝」であるが、前の二句は時間の経過による風景の変化、帰るべき場所への道のりの遠いことをいう。後の二句は舜の二妃である娥皇と女英の故事を用い、つれ合いを失った女性、ここでは泰娘の深い悲しみを表現する。先の秦嘉と韓壽の故事も夫婦についてのものである¹⁴。泰娘が張懸のもとに行ってから華やかな生活は詠われず、張懸の左遷と死、そして擬制的な夫婦関係の中で取り残された泰娘の悲運ばかりが強調される。

以上からわかるように、詩全体は序文で述べられた内容をなぞるように展開している。

詩は前半十六句までの華やかな生活とそれ以降の二人の保護者の死と左遷、そして再度の保護者の死という悲運の人生が対比的に詠われている。

一方、詩全体を押韻形式から見ると、基本的には四句換韻の形であるが、四句換韻になっていないところが二箇所ある。まず、最初の部分である。「泰娘家本閭門西，門前綠水環金隄，有時妝成好天氣，走上臯橋折花戲」という四句は二句で換韻しているといえよう。その後は四句ごとに換韻する形で十二句続く。そしてまた、「繁華一旦有消歇，題劍無光履聲絶」の二句が前後の四句換韻の中に孤立するように現れる。ここが内容的に見ても後半の泰娘の悲運の物語の始まりにもなっているのである。つまり、押韻の面から見てもこの詩は二つに分かれる形になっていると見ることができよう。

特にこの後半部分で詠われている内容に注目してみよう。後半では、泰娘からすれば、韋夏卿と張懸というふたり保護者の死が詠われているのだが、視点を張懸の側に据えてみると、貶謫の地で亡くなった士人と妓女の悲運の物語というものが見えてくる。韋夏卿と泰娘の関係を詠う部分ではふたりを夫婦に喩えるような典故は見えないが、張懸と泰娘の関係では先に見たように、夫婦の故事を用いる。娥皇、女英の話を含め、張懸と泰娘を婚姻関係にあった男女の故事を用い、張懸と泰娘の関係を擬制的な夫婦関係として詠っているのである。単に保護者が亡くなったというだけではなく、つれ合いを失った悲しみとして表現されている。

つれ合いを失った悲しみという点で言えば、劉禹錫自身、朗州で妻の薛氏を亡くしており、「謫居悼往」二首（卷三十）、「傷往賦」（卷一）を作ってその死を悼んでいる。高本に拠れば、元和七年のことである。

「泰娘歌」の制作時期は、前項で述べたように、元和六年から九年の間と考えられる。妻を亡くした後に「泰娘歌」を作ったとすれば、そこに劉禹錫のつれ合いを失った悲しみを読み取ることは可能かもしれないが、時間的な前後関係がはっきりしないため、断定するのは控えておく。

「泰娘歌」については、劉禹錫が泰娘の境涯を悼むのは、実はそのことに託して自分自身の悲境を歎き訴

えているのであると言われている¹⁵。そのような考え方に異を唱えるものではないが、作者にとってより直接的に自らの境涯を重ねられるのは張懸の存在ではなかったか。左遷されて朗州の長史となって赴任した人物が罪を解かれることなく貶謫の地で亡くなったわけである。また、憲宗は元和元年八月に、劉禹錫を含む「八司馬」については「縦逢恩赦，不在量移之限」（『舊唐書』卷十四，憲宗本紀上）、つまり恩赦があった場合には京師の近くの地に移すという規定をその八人には適用しないとした。都に帰る希望もなく、貶謫の地に追いやられたままの劉禹錫にとって、同じく朗州に左遷され、その地で亡くなった張懸という存在は自らの将来を映す鏡としては十分に重い存在だったであろうし、そのような未来は劉禹錫にとって最悪のものであったに違いない。そのような張懸の存在と彼に伴われてきた泰娘の悲運が相俟って「泰娘歌」の悲劇性を生み出しているのである。

三、「泰娘歌」と朗州

この詩では作者自身が朗州に左遷されているということが序文や詩に直接述べられているわけではない。しかしながら、その背景には、朗州という土地と、そこに作者が左遷されてあるという事実が大きく横たわっている。

詩の後半ではこの地方にかかわる故事が用いられているが、まず、朗州の地理的な位置関係について簡単に見ておきたい。『旧唐書』卷四十、「地理志」によれば、朗州は江南西道に属するが、天宝の初めには山南東道に属することになった。潭州も江南西道に属す。潭州の北側に西に朗州、東に岳州という形で接しているのであるが、この岳州には洞庭湖があり、汨羅江がある。また朗州には桃源があり、潭州には長沙郡があり、湘水が潭州から岳州に入って洞庭湖に流れ込んでいる。

二七句目「安知鵬鳥坐隅飛」は先にも述べたように、賈誼の「鵬鳥賦」の序に基づく。賈誼が左遷された長沙は、朗州に近く、劉禹錫の詩にも、朗州で亡くなった妻を悼んだ詩に「悵悵何悵悵，長沙地卑濕」（「謫居傷往」二首之一，卷三十）と、そのあたりを長沙と称する例がある。「安知鵬鳥坐隅飛」という句は張懸を賈誼になぞらえるとともに、その貶謫の地である長沙と張懸と劉禹錫が左遷された朗州とを重ね合わせ、賈誼と同様に貶謫の臣となっている詩人自身をも強く意識した表現であろう¹⁶。

また、この地は劉禹錫自身が言うように、古の楚の地である¹⁷。隣接する岳州には汨羅江がある。当然、屈原の事が詩人には意識されていた。「武陵書懷五十韻」には「招屈亭」という屈原を祀ったと思われる施設について、「今郡城東南亭舍其所也」とあり、後年の詩に「昔日居隣招屈亭，楓林橘樹鷓鴣聲」（「酬朗州

崔員外與任十四兄侍御同過鄙人舊居見懷之什，時守吳郡」卷二十四）と言っているところから考えて、その近くに住居があったと思われる¹⁸。このような屈原に纏わる歴史的環境が身近に存在したのである。

劉禹錫の詩には屈原を弔うために五月五日に行われていた舟の競争である「競渡」を詠った「競渡曲」（卷二十六）がある。また、妻の死を悼んで作った「謫居悼往」二首之二（卷三十）では、「潘岳歲寒思，屈平顛顛顛」という。これは「悼亡詩」で有名な潘岳に自らをなぞらえると同時に、楚の地に貶謫の臣として暮らす自らを屈原になぞらえている。朗州に関わりのある人物として屈原の存在を十分に意識していたと思われる。前稿で触れたが、夔州刺史時代（長慶（822）年～長慶四年）に作られた「竹枝詞」（卷二十七）の序でも「……昔屈原居沅湘間，其民迎神詞多鄙陋，乃爲作九歌，到于今荆楚鼓舞之。故余亦作竹枝詞九篇，俾善歌者颺之，附于末，後之聆巴歎，知變風之自焉」といい、屈原を強く意識している。劉禹錫の樂府作品の内容的特徴として「竹枝詞」のような民歌をとりあげた作品、あるいは「競渡曲」「沓潮歌」など土風に取材した作品が多く見られる¹⁹と言われるのも劉禹錫が屈原を強く意識していることの表れと考えることができるだろう。

また、朗州時期の劉禹錫の作品には「逐客」「孤臣」「謫居」という語がしばしば見える²⁰。これらの自らが貶謫をうけたものであるという自覚の底には、屈原、賈誼というふたりの人物の存在が強く意識されていたことであろう。

「泰娘歌」最後の二句、「如何將此千行淚，更灑湘江斑竹枝」は舜の二妃であった娥皇，女英の故事に基づく²¹。これは泰娘の落とした涙を二妃の涙に喩えているが、湘水は江南西道の永州，衡州，潭州，岳州を経て洞庭湖に流れ込む川であり，広く言えば，楚の地を流れる川と言える。これも左遷の地に伝わる伝説を利用し，涙の痕の上に更に涙を落とすという表現により，泰娘の悲しみの深さをあらわしている。また，娥皇，女英の二妃は屈原「九歌」中の「湘君」「湘夫人」として詠われているといわれており，ここでも屈原への意識が垣間見える。

「泰娘歌」の特に後半においては，直接的には張翥の事が歌われるが，同じ身の上である作者としての劉禹錫，さらには屈原，賈誼という楚に伝わる貶謫の臣の存在が意識され，また娥皇，女英という当地にちなむ故事が使われ，朗州，広くは楚という土地と強く結びついているという側面を指摘しておきたい。

四、「琵琶行」と「杜秋娘詩」

「泰娘歌」の序文では最後に「雒客聞之，爲歌其事，以足乎樂府云」と，作者が登場し，作詩の経緯を説明するが，先に見たように詩には作者は一切登場せず，

語り手に徹している。この点について，白居易の「琵琶行」，杜牧の「杜秋娘詩」について見てみたい。

「琵琶行」は序文でも，「元和十年，予左遷九江郡司馬。明年秋，送客湓浦口。聞舟中夜彈琵琶者，聽其音，錚錚然有京都聲。問其人……」と，先ず「予」つまり作者と思われる人物が登場し，中心人物である女性の琵琶奏者に問いかける。これから語られる物語の狂言回しであると同時にその場に同席することが宣言される。そして，最後に「予出官二年，恬然自安，感斯人言，是夕始覺有遷謫意。因爲長句歌以贈之。……」と，女性と作者自身の「遷謫意」がこの詩の重要な要素であることが前もって呈示される。

詩では全八十八句のうち，まず，最初の部分で作者が登場している。冒頭の十六句を挙げておく。

潯陽江頭夜送客，楓葉荻花秋瑟瑟。主人下馬客在舟，舉酒欲飲無管絃。醉不成歡慘將別，別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲，主人忘歸客不發。尋聲暗問彈者誰，琵琶聲停欲語遲。移船相近邀相見，添酒迴燈重開宴。千呼萬喚始出來，猶抱琵琶半遮面。轉軸撥絃三兩聲，未成曲調先有情。

ここには作者白居易と思われる「主人」が登場する。その「主人」が琵琶の声に耳を傾け，宴会を再度開いて琵琶奏者の女性を呼び出すというところから，女性の物語が展開していく。これ以後は琵琶の演奏の様子が描写され，女性自身の口吻を借りて身の上が語られる。

第六十三句目以降，最後までは作者自身の立場から琵琶の演奏と自らの人生についての感慨が詠われる。

我聞琵琶已歎息，又聞此語重唧唧。同是天涯淪落人，相逢何必曾相識。我從去年辭帝京，謫居臥病潯陽城。潯陽小處無音樂，終歲不聞絲竹聲。住近湓江地低濕，黃蘆苦竹繞宅生。其間旦暮聞何物，杜鵑啼血猿哀鳴。春江花朝秋月夜，往往取酒還獨傾。豈無山歌與村笛，嘔啞嘲哢難爲聽。今夜聞君琵琶語，如聽仙樂耳暫明。莫辭更坐彈一曲，爲君翻作琵琶行。感我此言良久立，却坐促絃絃轉急。淒淒不似向前聲，滿座重聞皆掩泣。座中泣下誰最多，江州司馬青衫濕。

「我聞」とあることからわかるように，作者自身が登場し，女性に対して「同是天涯淪落人」という感想を抱き，「潯陽城」に「謫居」する身を嘆く。音楽とは無縁の「潯陽」の地に対する不満を述べた後，再度琵琶の演奏を所望し，その演奏に「満座」の人々が涙する中，「座中泣下誰最多，江州司馬青衫濕」と，作者自身が最も感銘を受けたことを示して終わる。琵琶演奏者の女性の物語ではあるのだが，作者が半分近くの部分に登場し，先に挙げた六十三句目以降，最後の

三分の一近くは、作者の視点から自身の思いが表現される。悲運の琵琶奏者の女性の境涯に共感を覚える貶謫の身にある作者、そこに琵琶という当時の都会的な音楽の代表とも言える楽器の演奏の描写が相俟って、ひとつの世界を作り出しており、悲運の女性に自らの境涯を重ねるという枠組みでは「泰娘歌」と共通する部分があるが、作品に対する作者の位置という点から見ると、明らかに「泰娘歌」よりその姿を鮮明に感じ取ることができる。

杜牧の「杜秋娘詩」は前稿でも触れたとおり、「泰娘歌」を意識して作られたといわれている²²。五言百十二句という長編である。序文によれば、杜秋の人生は次のように語られている。唐の王室につながる人物である李錡は、徳宗の治世鎮海軍節度使となり、憲宗の元和二年、謀反し、破れた²³。李錡の妾であった杜秋は後宮に没収されたものの憲宗の寵愛を受け、憲宗の死後は穆宗の皇子懷懿太子の保姆となった。文宗は即位すると、宰相宋申錫と図って宦官王守澄を排除しようと試みたが、逆に王守澄、鄭注らは宋申錫が漳王（もとの懷懿太子）を帝位につけようとしていると讒言し、大和五(831)年に漳王は巢県公に貶黜された²⁴。これに伴って杜秋も故郷に帰されたのである。

参考までに詩の後半部分を挙げておく²⁵。

我昨金陵過，聞之為歎歎。自古皆一貫，變化安能推。
夏姬滅兩國，逃作巫臣姬。西子下姑蘇，一舸逐鴟夷。
織室魏豹俘，作漢太平基。誤置代籍中，兩朝尊母儀。
光武紹高祖，本系生唐兒。珊瑚破高齊，作婢春黃糜。
蕭后去揚州，突厥為閼氏。女子固不定，士林亦難期。
射鉤後呼父，釣翁王者師。無國要孟子，有人毀仲尼。
秦因逐客令，柄歸丞相斯。安知魏齊首，見斷簣中尸。
給喪蹶張輩，廊廟冠峨危。珥貂七葉貴，何妨我虜支。
蘇武卻生返，鄧通終死饑。主張既難測，翻覆亦其宜。
地盡有何物，天外復何之。指何為而捉，足何為而馳。
耳何為而聽，目何為而窺。己身不自曉，此外何思惟。
因傾一樽酒，題作杜秋詩。愁來獨長詠，聊可以自怡。

詩は序文をなぞるように詠われるが、その句数の多さが示すように、「泰娘歌」に比べて表現が精細である。まず最初に、李錡の妾となつてから、李錡の謀叛に至るまでが詠われ、その後、宮中に入ってから故郷に帰るまでの部分は、十三句目「聯裾見天子」から六十四句目「夜借鄰人機」までと、五十二句が費やされている。

上に挙げたのは詩の後半であるが、この詩でも「琵琶行」と同じように、六十五句目から「我昨金陵過，聞之為歎歎」と、作者が登場する。ここから最後まで、この詩の最大の特徴ともされている、詩の中に議論を入れている部分である²⁶。「夏姬滅兩國」から「突厥為閼氏」までは歴史上の女性の数奇な運命について

例を挙げ、「女子固不定，士林亦難期」と、そのような運命は女性だけに限らず、男性においても同様であることを例を挙げて述べる。最後に、「地盡有何物」以下で運命の不可解さについて言及し、「己身不自曉，此外何思惟（自分自身の身体についてさえわからないのに、どうしてその外のことなど考えられようか）」と思考停止とも思える言辞を連ね、「因傾一樽酒，題作杜秋詩。愁來獨長詠，聊可以自怡」酒を酌むとともに、詩を作つて自らの憂さを晴らすと締めくくっている。此の詩では主人公である杜秋についての描写は「泰娘歌」に比べて詳しいものの、最後三分の一あまりの部分は、歴史や運命に対する自己の見解を披瀝することに費やされている。

このように見てくると、妓女を主人公とする詩でありながら、「泰娘歌」が「琵琶行」や「杜秋娘詩」に比べて作者が語り手の位置に徹していることがよくわかる。「琵琶行」と「杜秋娘詩」が「泰娘歌」より後に作られたことを考えると、白居易と杜牧という詩人の独自性、特徴がよく現れているとも言える。

五、おわりに

「泰娘歌」と「琵琶行」を比べてみると、妓女の悲運の生涯に自らの人生を重ねて嘆くという枠組みは共通するものの、「琵琶行」では、語り手としての作者が詩の中にも登場するという点で大きく異なっている。「杜秋娘詩」は主人公の女性に関する物語については詳しく語られるが、最後に女性の人生からの連想で語り手自身の考えが述べられている点が、「泰娘歌」とは異なる。また、「杜秋娘詩」は杜牧が三十一歳の時の作で、覇気に富んでいた時期であり、此の詩に「天涯遲暮」の歎きを見るのは正鵠を得ていないと言われている²⁷。この点では「泰娘歌」「琵琶行」と「杜秋娘詩」とは性格が異なる。

「泰娘歌」、「琵琶行」、「杜秋娘詩」を作品と作者の関係という視点から見ると、「泰娘歌」だけが詩中にその存在を直接示すことなく、語り手に徹している。それは「泰娘歌」だけが、作者自身が序で言うように、物語的要素の強いジャンルである、楽府であることと関係しているのであろう。あるいは、「泰娘歌」は伝統的な楽府の語り口を取っているに過ぎず、白居易「琵琶行」と杜牧「杜秋娘詩」の方が独自の語り口を加えたものになっているとも言える。

三首の間の違いということ言えば、もうひとつ「泰娘歌」に特徴的なことがある。それは、全て妓女を詠った詩ではあるが、作者と詩中に詠われている妓女の間隔を考えると、「泰娘歌」に登場する女性が作者ともっとも身近な存在だということである。「琵琶行」の女性は白居易が左遷の地である江州で偶然出会った女性であるし、杜秋は杜牧にとっては殆ど関わりのない女性であった²⁸。泰娘は劉禹錫の長安での上司であった

韋夏卿の家妓であり、朗州の地に劉禹錫の後に左遷されてきた張憇が伴って彼の地に連れてきた女性でもあった。実際に会ったことがあるかどうかは別にして、長安から朗州へ左遷されてきた劉禹錫を追うかのようにやって来た女性である。そのような身近な存在の妓女を樂府の主人公として詠ったということがこの作品の大きな特徴である。

もうひとつの特徴は先にも述べたように、この作品が、朗州、広くは楚という土地と結びついているということである。「泰娘歌」はひとつには泰娘という妓女の悲運を詠ったものである。泰娘の悲劇は韋夏卿という保護者を失った後、張憇という新たな保護者を朗州で失い、京師から遠く離れた地で寄る辺ない生活を送っていることにある。同時に、この詩は泰娘を伴って朗州へと左遷されて当地で亡くなった張憇という士人の悲運をも詠っている。泰娘と張憇のふたりの悲運は朗州という土地と深く結びついている。そして、その悲劇性の背後には屈原、賈誼、あるいは湘君、湘夫人という、土地に纏わる文学性がそれを支えるものとして横たわっている。悲運の妓女物語ではあるが、それを支えている大きな要素として朗州（広くは楚）という土地の持つ文学性、政治性を無視することはできない。さらには、その地に貶謫の臣としてある作者自身の思いが絡み合っているのである。

最後に、劉禹錫は序文で「爲歌其事，以足乎樂府云」と言っているが、樂府であるという点について述べておきたい。朗州で、或いは長い貶謫の時代に作られた樂府全体についての考察が必要とは思われるが、「泰娘歌」に限定して言えば、妓女物語を語る語り手は詩の中では、自らの心情を直接表白することをしていない。しかしながら、屈原、賈誼というその土地の貶謫の臣の伝統を背景に、悲運の妓女と士人の物語を不特定の相手に語るという樂府の手法は、その時点において量移の可能性を排除されていた詩人にとって、より広範に詩を伝え、それを通して自らの悲運を嘆くには最良の形式だったのではないだろうか。

当時、樂府という形式の伝播の問題がどのようにとらえられていたのかという問題があるが、これについては稿を改めて考えてみたい。また、劉禹錫が朗州という土地をどのように見、その地の歴史や風俗をどのように詠っているのかという点についても更に考察を進める必要があると考えている。

注

- 1 「劉禹錫「泰娘歌」をめぐる」(上) (『愛知教育大学研究報告』第57輯 (人文・社会科学編), 2008.3) 以下、本稿中で言う「前稿」とはこの論文を指す。
- 2 齋藤茂『劉禹錫の樂府詩について』(『中國詩文論叢』第七集, 1988)
- 3 山内春夫「杜牧の「杜秋娘」詩について」(『杜牧の研究』

所収, 彙文堂書店, 1985)

- 4 前掲注2. 3. 論文参照。また、斎藤茂『妓女と中国人』(東方書店, 2000)にも同様の指摘がある。
- 5 前掲注2. 論文参照。
- 6 卞孝萱『劉禹錫叢考』(巴蜀書店, 1988)
- 7 本稿中の劉禹錫詩の引用は、断りのない限り、瞿蛻園『劉禹錫集箋證』(上海古籍出版社, 1989)による。本稿中に挙げた作品の巻数も同書による。
- 8 注6に挙げた書物以外に、蔣維崧等箋注『劉禹錫詩集編年箋注』(山東大学出版社, 1997, 以下「蔣本」と略す)、陶敏、陶紅雨校注『劉禹錫全集編年校注』(岳麓書社, 2003, 以下「陶本」と略す)、高志忠校注『劉禹錫詩編年校注』(黑龍江人民出版社, 2005, 以下「高本」と略す)がある。
- 9 郁賢皓『唐刺史考全編』卷一三九「江南東道，蘇州」(安徽大学出版社, 2000)
- 10 米嘉榮、田順郎、何戡の三人は段安節の『樂府雜錄』にも当時を代表する歌い手として名前が見える。
- 11 呂溫「故太子少保贈尚書左僕射京兆韋府君神道碑」(『全唐文』卷六三〇)に「以元和元年三月十二日，薨於東都履信里之私第，享年六十有四，寵贈尚書左僕射」とある。
- 12 「張憇爲將作少監，元和五年貶爲朗州長史」(『冊府元龜』卷七〇〇「郡守部 貪黷」)
- 13 賈誼「鵬鳥賦」序に「誼爲長沙王傅，三年，有鵬鳥飛入誼舍，止于坐隅。鵬似鸛，不祥鳥也。誼既以謫居長沙，長沙卑濕，誼自傷悼，以爲壽不得長，乃爲賦以自廣」(『文選』卷十三)とある。
- 14 秦嘉「贈婦詩」三首并序(『玉臺新詠』卷一)に、「寶釵可耀首，明鏡可鑒形」とあり、この鏡は病のために実家に戻っていた妻の徐淑に贈ったとされる。韓壽については『世說新語』「惑溺篇」に見え、韓壽は賈充の娘と密通していたが、韓壽の身体から漂う珍しい香の香り(賈充が皇帝より賜ったもの)のために賈充の知るところとなり、結局、賈充は娘を韓壽に嫁がせたという。
- 15 「その流落した妓女を主人公として歌物語にまとめている点、および、泰娘の境涯を傷む意に劉禹錫自らの境涯に対する歎きが重ねられている点に、この作品の注目すべき要素があると思われる。」(齋藤茂「劉禹錫の樂府詩について」
「泰娘の薄命の物語に託して、実は流謫された自己の悲境を歎き訴えたものである。」(山内春夫「杜牧の「杜秋娘」詩について」)
- 16 朗州で作られたと思われる別の詩でも、次の例のように自らを賈誼に喩えている。「賈生明王道，衛綰工車戲」(『詠史』二首之二，卷二十一)
- 17 「按天官書，武陵當翼軫之分，其在春秋及戰國時，皆楚也」(『武陵書懷五十韻』引，卷二十二)
- 18 宋，王象之『輿地紀勝』(李勇先校点本，四川大学出版社，2005)卷六十八「常德府」「景物」の条に、「招屈亭，今郡南亭即其所，在安濟門之右，沅水之濱。每端午日，以角黍餉飯，揚桴中流，競渡以濟，邦人縱觀」とあり、その後に劉禹錫の「競渡曲」を引用する。
- 19 注2. 前掲論文。
- 20 「逐客無印綬，楚江多芷蘭」(『送韋秀才道沖赴制舉』卷二十八)
「逐客顯頗久，故鄉雲雨乖」(『臥病聞常山旋師策勳有過王澤大治因寄李六侍御』卷二十三)
「朝來入庭樹，孤客最先聞」(『秋風引』卷二十六)
「謫居愁寂似幽棲，百草當門茅舍低」(『喜康將軍見訪』外集卷八)

また、詩題にも、「元和甲午歲，詔書盡徵江湘逐客，余自武陵赴京，宿於都亭，有懷續來諸君子」（卷二十四），「〔謫居悼往〕二首（卷三十）」のような例がある。

- 21 梁の任昉『述異記』（『四庫全書』本）卷上に、「湘水去岸三十里許，有相思宮，望帝臺。昔舜南巡而葬於蒼梧之野。堯之二女娥皇女英追之不及，相與慟哭，淚下沾竹，竹文上爲之斑斑然」とある。

22 注3．前掲論文。

23 『舊唐書』卷一一二，『資治通鑑』卷二三七。

24 『舊唐書』卷一七五，穆宗五子列伝，『新唐書』卷八十二，十一宗諸子列伝。

25 引用は，馮集梧注『樊川詩集注』（上海古籍出版社，1982）による。

26 注3．前掲論文に，「〔杜秋娘詩〕に認められる第二の特徴は，此の詩に議論が入っているという点である。禹錫のそれ

が（「傷秦姝行」を含めても）主人公の経歴を同情的に叙事する—それに託して悲嘆を述べた—に留まるのに対して，牧のそれは，第一段に秦娘の場合同様に秋の経歴を叙事し，そのことから連想して，人間の運命についての議論を，四十句の長きに亘って展開している。斯く女性のことを艶麗に歌った詩に議論を入れた作品は，牧以前には全く見えないのであって，特異であり，これこそ此の詩の最大の得失と言い得る」という指摘がある。

27 注3．前掲論文。

28 注3．前掲論文に，「牧にとって秋は（伝聞によって以前より何程かは知る所があったにしても）殆ど関りのない女性であったと言うべく，金陵の地で実際に彼女にあって身の上話を聞いたものとは考え難い」という。

（2008年9月17日受理）